

歴史館開館の頃

宮澤 正純

(元 茨城県立歴史館史料部長)

知事部局の学事文書課で始まっていた県史編さん事業が、新しく建設される「茨城県歴史館」機能の三本柱の一つと決定し、組織として室員全体で移動したのは正式開館前の昭和48年4月のことであった。

部・課・室等の組織も流動的ではっきりした組織として固まってくるには少し時間が必要であった。完成していた建物は今の本館のみで、付属建物類もまだ完成を見なかった。

本館内部には机や椅子は勿論、書架もロッカーなど事務室に必要な備品が無く、県立水戸農業高等学校時代の椅子と机を、まだ取り壊されずにいた体育館から運んで部屋の形を整えたのが初仕事であった。

開館を目差して建設工事が進むなか、担当の編さん事業はとぎれることなく続ける努力を続けていた。辺りの環境は駐車場も取り付け道路も土盛のまま、雨など降ったら田圃の中を歩くようなありさまであった。県史関係でお見えになるお客もこの様子には驚いていたようだ。玄関にたどり着いた来訪者の靴の汚れは気の毒なほどであった。帰りには館の長靴を使って戴いた来訪者に大変感謝され、史料が結ぶ縁で長い付き合いになったその時の研究者と、酒席の話題の第一番は何時でも長靴とドロコであった。

庭の整備もまだ進行中で、巡る季節には自然にかえってあちこちに野草が見られ、初春の「金蘭」「銀蘭」から冬期の「冬の花蕨」まで、下庭に造成中の「野草園」に行かなくても十分に季節を堪能できた。池からの水路には常時水が流され、水生の動植物も多く、春になれば多くの蛙が賑やかであった。ついでに記しておけば、現在車庫の隣で毎年見事な実をつける「グレープフルーツ」は、当時、同僚が口からだしたカルフォルニア産の実を戯れに植木鉢で発芽させ、地植えして育てたものである。